

令和 元 年 8 月 25 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980060

氏 名

李 美奈

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 ボローニャ (国名 イタリア)
2. 研究課題名 (和文) : 近世のヴェネツィアユダヤ人共同体における自治と宗教実践
3. 派遣期間: 平成 31 年 4 月 9 日 ~ 平成 31 年 8 月 4 日 (118 日間)
4. 受入機関名・部局名: ボローニャ大学 歴史文化学科
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ボローニャ到着後、受け入れ先のファッキーニ教授との面談を通して、以下 2 点の研究計画の変更を行った。1) 当初はユダヤ人共同体の資料館を中心に収集を行う予定であったが、それらが非常に断片的であり、最初に手をつけて分析を行うのは難しいこと、またヴェネツィア共和国の資料が体系的に残っていることから、共和国資料をまず調べてから共同体資料を関連付けた方が良いこと。2) ヴェネツィア政府資料館にはユダヤ関連の資料も非常に多く残っているため、まず資料に当たる前に先行研究の調査を通してどのような資料があるか把握し、当たるべき資料を厳選する必要があること。

それゆえにまずボローニャ大学およびヴェネツィアの多数の図書館で先行研究を収集し、共和国におけるユダヤ人統制を担当した役職、またその任務内容や記録の内容について確認した。

その後ヴェネツィア政府資料館に足を運び、それらの役職の資料のうち、ユダヤ人共同体に関係する文書の収集を行った。対象としている 17 世紀前半を中心に一通りの撮影を行ったものの、全て精読するには数が多いため、年代順に要件を把握する作業を現在行っている。

また、滞在中にボローニャ大学での宗教学の講義をいくつか聴講した。とりわけ、ファッキーニ教授による近世イタリアの都市文化と宗教に関連についての講義により、ヴェネツィアのユダヤ人ゲットーを新たな問題体系に置いて考察する視点を得た。また 6 月 25~29 日にエストニアのタルトゥ大学で行われたヨーロッパ宗教学会に参加し、ヴェネツィアのユダヤ人共同体管理の方針についての報告を行った。ヴェネツィアの他の異教徒や他の西欧社会の状況についてコメントを頂き、より広い文脈でヴェネツィアのユダヤ人の状況について捉える必要を感じた。また学会の様々な発表を聞き、近年のヨーロッパ宗教学の関心が移民とアイデンティティを中心にしていることを知り、自身の研究との関連性の可能性も発見した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣前から精読していた資料について、派遣期間中の先行研究の調査によって得られた新たな観点を踏まえて、9 月 23 日～25 日にドイツ、ハンブルク大学で開催される学会“Simone Luzzatto’s scepticism – in the context of early modern thought”にて発表を行う予定である。

また、収集したヴェネツィア共和国側の資料と、ユダヤ人共同体側に残されている資料については、両者を付き合わせて、共和国がどのようにユダヤ人を支配し、またユダヤ人がそれを受容したかという関係について明らかにしたいと考えている。ただし、ヴェネツィア・ユダヤ人共同体の文書館のカタログは、残されている資料の内容についても示しているのに対し、ヴェネツィア共和国の資料カタログは年代のみが記述されているため、まずはその概要を把握し、両者の資料の間で付き合い合わせられる事例がどのくらいあるかを抽出する必要がある。その作業の後、共和国とユダヤ人共同体の支配-被支配関係を知るための事例を選定し、精読、分析を行う。そのために派遣終了日に帰国せず、滞在を継続することにした。これらの作業は 2020 年 8 月にニュージーランド・ダニデンで行われる国際宗教学会で発表するべく、準備を行うつもりである。

またヘブライ語での先行研究についても学ぶためにイスラエルにも滞在する。ヘブライ大学、イスラエル国立図書館、テルアビブ大学には未出版の博士論文や大学出版の雑誌など、日本からアクセスの難しい先行研究が多数存在する。また一次資料の収集もイスラエルで行う必要がある、イスラエル・ヘブライ大学にあるエルサレム・ユダヤ人歴史文書館に、ヴェネツィア・ユダヤ人共同体の研究を行ったデイヴィッド・マルキール教授が収集した資料群があり、またエルサレムのイタリア系共同体博物館はヴェネツィアの共同体に関する資料を多く所有しており、それらも調査する必要がある。これらの中には共同体規則の記録や祈祷書、儀礼に関する解釈など、ユダヤ人側の資料が多く含まれると予想され、ヴェネツィア・ユダヤ人共同体文書館の資料における欠如を補う可能性がある。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

日本では手に取ることが難しかった先行研究群に触れ、研究の可能性についてより具体化することができた。日本にはイタリア・ユダヤ史の研究者はおらず、出発前は先行研究について体系的に学ぶ機会が得られなかった。日本国内でも出来る限り収集に努めてはいたが、圧倒的に不足していたことに気づいたのは、ファッキーニ教授の助言にしたがって先行研究の調査を開始してからであった。とりわけイタリア語の先行研究は一次資料からの史実構成に注力したものが多く、それらを詳細に学ぶことで自身の研究手法をより具体的に検討することもできた。

また、ボローニャ大学の講義受講やヨーロッパ宗教学会への参加を通じて、より現地や当事者に接近した視点からの研究に触れ、またさまざまな研究者との交流により自身の研究を広げるための可能性について考えることができた。前述の通り近い分野の研究者が国内には不在であったため、研究動向との関係を築く意識が不足していた。イタリアの講義聴講や国際学会発表での議論を通して、ヨーロッパ社会の宗教に関する観念やイタリア各地域の歴史に対する彼らの視点を学ぶことができ、また今後自身の研究を海外に発信していく上で、研究対象を置くべき文脈についてより深く知ることができたと同時に、どのように問題をメタ化し文脈を広げていけるかについても考える契機となった。

何より貴重だったのは、ヴェネツィアで収集可能な資料についての全体像を知り、まとまった収集を行えたことである。先行研究の調査を通じて研究手法についてより詳細に知ることができたが、その分量や資料の状態、構造などについて知るには実際の一次資料に継続的に触れる必要があった。これらの情報は研究の作業工程を考える際に非常に重要である。当初の想定をはるかに上回る量の資料を目の当たりにし、研究テーマと切り口について検討し直す必要を覚え、また資料性格の概要について学んだことで、長期的視点での研究の可能性も広がった。これらの学びは現地に滞在したからこそ得たものである。